

新型インフルエンザ発生に 備えた国立病院機構の体制

座長 林 茂樹

第63回国立病院総合医学会
(平成21年10月23日 於仙台)

IRYO Vol. 64 No. 10 (655) 2010

キーワード 新型インフルエンザ (→653p を参照), A/H5N1, A/H1N1, 国立病院機構

本シンポジウムは、当初、世界各国に発生している強毒性鳥インフルエンザがヒト-ヒト感染能力を備えた際におこる“新型インフルエンザ A/H5N1”がわが国に飛来した際の国立病院機構の体制を問うものとして企画したが、平成21年5月メキシコ国に発した“ブタインフルエンザ A/H1N1”がわが国に襲来した状況下にて開催された。

冒頭に厚生労働省健康局結核感染症課高山義浩先生から、法律施行後はじめて実施された停留措置をはじめ、国の新型インフルエンザ (→653p を参照) 対策の変更点などが基調講演的に述べられた。機構施設の施設長あて新型インフルエンザに対する準備状況を尋ねたアンケート調査研究 (平成20年度国立病院機構共同研究) では、多くの施設で準備体制が不十分であることが報告された (東京病院中島由槻先生、災害医療センター妹尾正子看護師)。比較的组织が進んでいる施設として、国立国際医療センターの準備体制が泉信有先生から述べられ、また災害医療センター上村光弘先生は、新型インフルエンザ発生時の対応訓練から得られた諸問題の解決策を提起した。

ブタインフルエンザ A/H1N1 がわが国ではじ

めに大流行した関西地域での猛烈な経験 (大阪医療センター白阪琢磨先生、神戸医療センター島田悦司先生) に基づいた助言は、今後機構施設の体制作り に大いに役立つと考えられた。ワクチンによる感染防御 (三重病院庵原俊昭先生)、その他の感染予防の工夫策 (仙台医療センター西村秀一先生)、まん延期における診療継続計画作り (北里大学医学部和田耕治先生)、それぞれについて重要な報告があり、締めくくりとして国立病院機構本部梅田珠実医療部長から、機構本部ならびに各施設が取るべき体制について発言があった。

学会本部から折角大きい会場を用意していただいたにもかかわらず、聴講された方は比較的少数であった。このことはインフルエンザへの関心が低いことを予想させ心配な点として残ったが、シンポジウムでは、貴重な報告と熱心な討論を通じて新型インフルエンザの予防からパンデミック時の医療体制まで、ほぼインフルエンザ対策の全般について大いなる成果が得られたものと考ええる。

本報告は第63回国立病院総合医学会で発表されたシンポジウムの内容に加筆したものである。

国立病院機構災害医療センター 院長

別刷請求先: 林 茂樹 国立病院機構災害医療センター 院長 〒190-0014 立川市緑町3256

(平成22年4月21日受付, 平成22年7月9日受理)

Preparedness of Japanese National Hospital Organization for Outbreak of Highly Pathogenic Avian Influenza

Shigeki Hayashi, NHO National Disaster Medical Center

Key Words: highly pathogenic avian influenza, A/H5N1, A/H1N1, Japanese National Hospital Organization